

学生ビジネスとしてはそこそこかたちになったほうだと思えます。学生のデザイナーを何人も抱えていたので、「こんな感じのユニフォームをつくりたい」と注文が入ると、デザイナー全員にデザインをさせました。次の打ち合わせのときには、六〜七種類のデザインが上がってきているのですから喜ばれました。一般企業は学生相手だからとデザインにも手を抜き、学生にとってはほとんど選択肢がない。「種類があつて選べない」と好評だったのです。

選ばれたデザイナーにはデザイン料が発生します。一種のコンペですからデザイナー同士も競争です。刺繍やワッペンのデザインなど手間暇にかかる相談にも親身に対応しました。あれよあれよと口コミで噂が広がり、慶應義塾以外の大学や高校にも顧客が拡大。学園祭単位や企業からもオーダーが来るようになり、宇多田ヒカルのコンスートTシャツ二万枚を製造納入したこともありました。大学卒業後も会社経営を続けていたときに、イラク戦争直前のバグダッドを訪問することになったわけです。

いまから当時を振り返ると、私は「顧客や社員のため」と言っていたものの、実際は単に「お金を追っていた」のです。そうした私の価値観を、イラク戦争は一瞬にして突き崩しました。結局、イラクで私は何もできなかったわけですが、「いただいた人生」で日本人・竹

田恒泰として世のため人のために何ができるかを考え抜いた末に出た答えが、自らの出自でもあり、日本の根幹を担う存在と言える皇室について研究して、本を書くことだったのです。

「ペンには剣よりも強し」。福澤諭吉先生が引用された言葉を糧に、私は皇室を研究してその成果を本にしようと考え、作家になることを決心しました。会社は後輩に引き継ぎ、経営からは完全に手を引きました。退路を断って鎌倉に引きこもり、当時まだ誰も注目していなかった孝明天皇の研究に一身を注ぐことにしたのです。

「惜しまれながら死んでいく」という究極の幸せ

ここで、本当の幸せとは何かという問題について探求していきましょう。人は死ぬ間際にどんな状態だったら、自分は幸せだと思えるのでしょうか。棺桶に半分足を踏み入れたときに、預金残高が多いから幸せと思う人はいないはずですよ。どんなに巨額の財産を築いても、何一つ死後の世界に持つていくことはできないからです。

人は死ぬ間際にどんなことを思い浮かべるのでしょうか。人によって異なっても当然ですが、私の場合には先述のとおり、死の危険を経験したときに、家族や大切な人たちのことを思いま

した。おそらくほとんどの人はそこで、大切な人と過ごした場面を思い出すのではないでしょう。か。

釈迦は将来国王になれるであろう身分を捨てました。死から観照すれば、そんなものには何の価値もないからです。われわれの人生にしても究極的には同じはずです。だからこそ「人のために生きる」という発想が生まれてくるのです。ならば、どんなかたちで見送られたら、幸せを感じながら安らかに逝くことができるのでしょうか。

それは「惜しまれながら死んでいく」ということに尽きるのです。しかし、大切な人に心から惜しまれながら見送られるというのは、簡単にできそうではありません。みんなが自分を取り囲んで「お父さん、死なないで」「お母さん、いっちゃヤダ」「おじいちゃん、もつと長生きして」と必死になってもつと生きてほしいと懇願しているところで息絶える。それが人間としてもつとも幸せな「死に方」なのです。

桜の開花が人を感動させるのは、散るからです。もし桜が散らなければ、誰も花見はしないでしょう。人間の寿命は長くて百年そこそこ。いつ終わるかも分からない。だからみんな必死になって精一杯生きるのです。

たとえば、長年連れ添った奥さんから「あなたと一緒になれて本当に幸せでした。もし来

世というものがあるなら、もう一回あなたと一緒にになりたい」などと言葉をかけてもらえたらどうでしょう。これほど人生の喜びを感じる言葉はないはずです。その一言で、人生は充実していたと実感できます。

現実に富や社会的地位を得た人ほど、それが幸せとは本質的に無関係であることに気づいているはずです。その典型がマイクロソフト創業者のビル・ゲイツ。彼は幸せになるために金銭的な成功を勝ち取る決意をして、マイクロソフト社を立ち上げました。人の何倍も働き、ウインドウズの成功で小金持ちになりましたが「自分はまだ幸せではない」と感じたそうです。きっとまだ稼ぎが足りないからだと言じ込み、独占禁止法違反スレスレの手法も駆使しながら、以前よりもさらにバリバリ働いて、一九九四年には世界一の大金持ちになりました。

ところが、そこでビル・ゲイツは「自分は世界一の金持ちなのに、なぜ幸せではないのか」と思い悩んだそうです。CEO職を退いた二〇〇〇年に、現在世界最大の慈善基金団体「ビル&メリнда・ゲイツ財団」を創設し、世界中に巨額の寄付をスタートします。世界中から感謝されるようになって、ようやくビル・ゲイツは幸せを噛みしめているようです。私に言わせれば、気づくのが遅すぎますが……。

先に、お金持ちでも不幸な人や、貧しくても幸せな人はたくさんいると述べました。人間の価値は、築いた財産の大小や、社会的地位の高低で決まるわけではありません。では、何で決まるのでしょうか。その答えが見えてきました。

人間の価値は、世のため人のために生きてきたかで決まるのです。家族のため、地域のため、会社のため、そして国のために何ができるかを問いつづける人生こそが、世のため人のために生きるということです。そうして他者のために生きた人は、大切な人に惜しまれながら死ぬという、究極の死に方を実現できる可能性があります。

これが人間にとって最高の死に方であり、もっとも美しい死に方であり、そして、これに優る生き方はありません。そこに議論の余地はありません。すでに答えは出ているのです。

ポイント

- ◆ 本当の幸せとは、惜しまれながら死んでいくことである。
- ◆ 人間の価値は、その人が世のため人のために生きてきたかで決まる。

「欧米人にとって労働は「神から与えられた罰」

この「世のため人のために生きる」という生き方は、日本人が太古の昔から実践してきたことです。労働に対する考え方を補助線にすると分かりやすいでしょう。日本人にとって働くことは喜びであり、幸せそのものです。ですから八十歳になってまだ現役で働いている人は「うらやましい」と言われます。欧米人が見たらきつと「お気の毒」と言うに違いありません。欧米人にとっては、三十代や四十代で大成功してリタイアすることが「うらやましい」ことであって、働きつづけることは何もうらやましくはないのです。このように、日本人と欧米人では働くということについての価値観が全く違います。

では、欧米人にとって働くとはいったい何なのでしょう。答えを先に言うと、彼らにとって働くとは「神から与えられた罰」と考えられています。

たとえ毎日の仕事^{つら}が辛くとも、バカンスがあるから頑張れる。十一カ月の罰に耐えれば、その先には一カ月間のバカンスが待っているのです。その間、どこで誰と何をしてもよいですし、何もせずに寝そべっていても、ちっとも構わない。

仕事^{つら}が成功するとバカンスやアフター・ファイブが充実します。仕事はプライベートを充